私のモーツァルト探訪　第3回

「旅するモーツァルト」の旅の意義

海事研究家
神戸モーツァルト研究会会員
大阪大学/神戸大学非常勤講師　野澤和男

はじめに
§1. 旅とは何か
§２.旅人モーツァルトの旅
§３. 「旅するモーツァルト」の旅の意義
§４. おわりに
人生≡「人がこの世に生きてゆくこと」≡旅

アムステルダム: J.B.ヴィンクラー作、デ・バイヤーによる銅版画(1765)

カプツィーナーベルクから眺めたザルツブルクの風景:ナウマン原画エッチング〈1791〉

はじめに

人は誰しも長い人生においていろいろな形の旅をする。
18世紀に生きたモーツァルトは35年という短い生涯のなかで計17回の大小の旅をした。しかし、その日数の総計が、彼の人生の３分の１に匹敵する膨大な旅であったことはあまり知られていない。

その時間の流れの中で1000曲に達する膨大な数の名曲を残した。その途方もない旅は彼にとってどのような意味を持ったのか、さらに彼の作曲活動や作品にどのように影響を与えたのであろうか、大変興味あることである。

しかし、モーツァルトの残した膨大な書簡集や彼について書かれた書籍などを読んでみても、上述の疑問に直接答えてくれる記述は見当たらない。そこから感じられる彼の旅は、我々がそこはかとなく抱く旅情といったイメージをほとんど感じさせない。彼の旅は何か淡々として事務的になされ、むしろ最近の言葉で言う、出張（Business trip）を連想させるような旅であることを感じさせるのである。

　成長してから死の年まで展開された旅はいうまでもなく、6歳で始まった幼年期の旅でさえもそのように感じさせる。一体、モーツァルトは旅を楽しんだのであろうか。

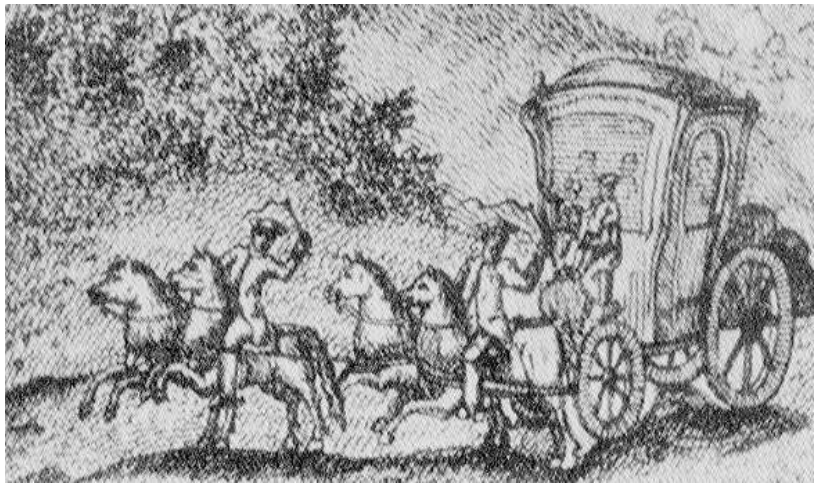
海老沢敏は著書「横顔のモーツァルト」の中で、モーツァルトの旅について次のように書いている。
「（彼の旅は）ただひたすら音楽へと収斂する形のものであった。音楽を中核として音楽に関係ないものはほとんどなく‥‥（彼の人生に於いては）度重なる旅行が点在しているのでなく旅のただなかで（人生が）展開してゆく‥‥（そのような旅であった）」と。

また、アルフレート・アインシュタイン（1880-1952, 物理学者アルベルト・アインシュタインの従弟との説がある）によると次のようである。
「‥‥‥モーツァルトがこの地上の客に過ぎなかったことはある程度、真実である。このことは最も高い、最も精神的な意味でも妥当である。しかしまた普通の、人間的な意味でも妥当である。モーツァルトはどこにでも本当に安住しなかった。彼が生まれたザルツブルクにも、彼の死んだウィーンにも安住しなかった。そしてザルツブルクとウィーンの間には、ほとんどあらゆる方向への旅がある。‥‥‥これらの旅行が彼の生涯の大きな部分を占めているのである。モーツァルトにとって旅行に出かけることが決心だったことは一度も無く居住地へ帰ることはいつも心残りか強制と結びついていたのである。　‥‥‥」

「モーツァルトの旅」とは、一体どのようなものであったのであろうか。
モーツァルトの生きた時代（1756-1791）は歴史的に変化の激しい興味ある時代であった。

「太陽の沈まない帝国」として絶大な権力を振るった神聖ローマ帝国ハプスブルグ王朝、その皇帝・女帝の知遇を得ながらザルツブルクに成長したモーツァルトは西欧諸国、特に、英国産業革命の時代に国王に謁見、演奏、披露し、フランス革命への時代に国王に謁見、多くの貴族や著名な音楽家と交遊した。近代ヨーロッパの成長と市民社会の大変革の時代環境の中で旅をしたその途方もない人生経験は彼の先天的才能と相俟って人間的成長や音楽上の業績に大きな影響を及ぼしたことであろう。その意味においてモーツァルトの旅に大きな興味を抱くのである。

本小文では、まず、一般的に、旅と何か、旅にはどのような種類があるのかを分析し、その後に、記録に残るモーツァルトの旅を時系列的に辿りながら、彼の旅はどのように位置づけられるのかを比較、考察してその特異性を検証する。同時に、モーツァルト作品を鑑賞しながら彼の旅が作品にどのように影響しているかを味わってみたい。



§１．旅とは何か

（１）「旅」という言葉で思い出す有名人の旅

①松尾芭蕉の旅：　奥の細道　　松尾芭蕉(1644～1694)

「月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也。船の上に生涯を浮かべ馬の口とらえて老をむかうる物は、日々旅にして、旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。・・・・・・」

みちのくの歌枕を訪ねて心の世界の展開を求めた。新しい俳句の境地として、「不易流行」と「かるみ」という蕉風としての２つの重要な境地に到達した。

②ゲーテの旅：

文豪ゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe、 1749 - 1832：ドイツの詩人、劇作家、小説家、科学者、哲学者、政治家）ゲーテは北イタリアの諸都市からローマ、ナポリ、シチリアへと1年10ヶ月の旅を行い、それをもとにして「イタリア紀行」を書く。彼はワイマール公国の顧問官（政治家）と作家という二足の草鞋をはいていたが、1786年、突如、公務をすべて投げ出し遁走するようにイタリアへの旅に出た。イタリアは若い日から夢見た憧れの都であった。後、詩劇『ファウスト』の構想が固まったという。

③ 小田実の旅：

小田実(1932-2007：作家、平和運動家)はハーバード大学留学の帰途、ヨーロッパ大陸を1日1ドルで旅し各国を観察して巡った。「・・・私は世界を見たかった。留学を足がかりにさらに大きな旅に出た。これが「何でも見てやろう」の旅だ。・・・」帰国後、小説「何でも見てやろう」を書く。

④有馬皇子の旅：　　有馬皇子640(舒明12)～658(斉明4)
孝徳天皇皇子であったが、中大兄皇子暗殺の謀略にかかり、刑地に赴く途上に自ら傷みて、岩代(和歌山県日高郡南部町)にて松が枝を結ぶ歌二首を詠む。

磐代(いはしろ)の浜松が枝(え)を引き結びま幸(さき)くあらばまた還り見む(万2-141))
家にあれば笥(け)に盛る飯(いひ)を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る(万2-142)

その他、旅…で頭に浮かぶ有名人を取り上げると、メンデルスゾーン、クリスチャン・バッハ、ディキンズ、シェーン、西行、大黒屋幸太夫、種田山頭火、森の石松、小澤征爾、植村直己、・・・など、枚挙に暇がない。それぞれの職業の人がそれぞれの目的をもって旅をしている。

（２）「旅」の定義と種類：

国語辞書で「旅」を引くと、次のように書かれている。

ⅰ)①差し当たっての用事ではないが、判で押したような毎日の生活の枠からある期間離れて、ほかの土地で非日常的な生活を送り迎えること。

②差し当たっての用事のために遠隔地に赴くこと。

ⅱ) 自宅を離れて泊りがけで遠くに行くこと。

ⅲ）①広義では、人が徒歩もしくは何かしらの交通手段を用いて、空間的、物理的に移動する事である。

②狭義では、観光地や行楽地などへの観光（宿泊を含む場合が多い）を表し、買い物、通勤、出張などとは区別される。一般的に「旅行」と言う場合は、狭義の旅行を指す場合がほとんどである。

旅行の種類：　注）□□□□：モーツァルトの旅で思い浮かぶイメージ、§3参照

① 家族旅行、行楽旅行、リフレッシュ旅行、バカンス旅行、社員旅行、慰安旅行、帰省旅行、新婚旅行
②遠足、修学旅行（卒業旅行）、研修旅行、見学視察旅行、研究発表旅行
③ 商業旅行(納品旅行)、営業旅行、行商
④ 演奏旅行、講演旅行、プレゼンテーション旅行、旅興行、見世物旅行、就職旅行、公演旅行
⑤ 取材旅行、招待旅行、漫遊旅行、遊歴旅行、学会出席
⑥視察旅行、国際交流旅行、親善旅行、儀礼旅行
⑦ 一人旅、人生の旅、探求旅行、放浪の旅、吟遊詩人旅行、奥の細道的旅行、巡礼、逃避旅行

旅行の形態で分類：

- **参加者**：家族旅行、社員旅行、修学(学生)旅行、新婚旅行
- **参加人数**:団体旅行、個人旅行、一人旅
- **交通手段**:徒歩旅行、自転車旅行、馬車旅行、鉄道旅行、船旅、クルーズ旅行、航空機旅行
- **目的地**:海外旅行、国内旅行、温泉旅行、宇宙旅行、海底旅行
- **形態**:日帰り旅行、滞在型旅行、周遊型旅行、パッケージ･ツアー
- **目的**:教育、学会、視察、講演、公演、演奏、興行、商業、親善、見世物、巡礼、吟遊、放浪、漫遊、気まま、逃避
- **費用**:私費旅行、公費旅行、招待旅行、無賃旅行、ヒッチハイク

英語の「旅」の分類：travel：長い旅、journey：陸上の比較的長い旅；tour：観光/視察/漫遊、voyage：長い船旅/飛行機の旅、trip：個人あるいはパッケージなど広範囲に使用、短期、excursion：遠足、遊覧、特定目的の小旅行/団体　観光旅行/割引周遊旅行、picnic：野外食事の遠足/行楽、hiking：ハイキング/徒歩旅行など

旅の意味は広い。「モーツァルトの旅」はどれに対応するのであろうか。

§２．旅人モーツァルトの旅を辿る

1756年モーツァルトがザルツブルクに呱々の声を上げてから1791年にこの世を去るまでの35年間に17回、人生の３分の１に匹敵する旅をした。表１はモーツァルトの生涯と旅年表、図１はモーツァルトの旅の行動範囲を示す。この壮大な「モーツァルトの旅」は一体、いかなるもので、彼の人生や音楽にどのように影響を及ぼしているのであろうか。本章では「モーツァルト事典」（東京書籍）の年譜などをもとにして、モーツァルトの旅の足跡（スケジュール、道程、内容）を時系列的に抽出し、考察してみる。

(1) 旅立の前：レーオポルトの育成過程

1)　「ナンネルの楽譜帳」はレーオポルトが当初、音楽の才能を発揮していた7、8歳の娘ナンネルのハープシコードのレッスン用として編んだもので、音楽の基礎や楽典の勉強に用いられていた。それには、レーオポルトの手跡で“この楽譜帳はマリー・アンナ・モーツァルト嬢のもの、1759年”とフランス語で書かれており、50曲ほどの小品が収められていた。当時、3歳になるヴォルフガングは楽譜帳を使ったナンネルのレッスン光景をいつも傍らで見ながら興味深げに聞いていたという。ある時、姉の練習の後に、ハープシコードに近寄っては自分で三度の和音を弾き出して楽しみ、

何時までもそれを鳴らしてご満悦の様子であった。（ナンネルの証言）度重なるこの光景を目にしたレーオポルトは神からヴォルフガングに与えられた異常な才能を予感して音楽教育に熱を入れはじめるようになり、1760年（4歳）になると、ナンネルの楽譜帳はヴォルフガングのテキストとしても使われるようになった。レーオポルトはこの中に息子の勉強記録を書き込みながらハープシコードの手ほどきを進めた。

2） ５歳の誕生日の直前にはレーオポルトはその才能が予測通り、並々ならぬものであることを直感し楽譜帳にヴォルフガングの正確な記録を残すようになった。かくして、1761年（５歳）の初めのころには、ヴォルフガングの最初の作品（$K^6$1a, 1b）が生まれた。9月にはザルツブルク大学講堂で上演されたラテン語の学校劇「ハンガリー王ジギスムンドス」に踊り手として出演し、12月には作品（$K^6$1c, 1d）が生まれた。♥http://www.youtube.com/watch?v=I-tboYk0Fho

3） ナンネルとヴォルフガングの天才現象をもはや疑いないものと確信するに至ったレーオポルトは、それまで長年突き進んできた自分の野望としてのヴァイオリン教授や作曲家としての道をすべて放棄し、宮廷に仕える以外の残された時間のすべてを2人の天才姉弟、とりわけ、ヴォルフガングの育成に専念するようになった。「神がザルツブルクに遣わした奇跡を世界に知らしめる」ことこそ彼の使命であると悟ったのである。姉弟2人、或いはヴォルフガング1人を連れ、また家族で、大小さまざまな旅行を企画、機が熟するのを待ち、1762年1月12日にその計画を実行に移した。以下に、17回の旅行の骨子を抽出し、特徴(→)と共に示す。

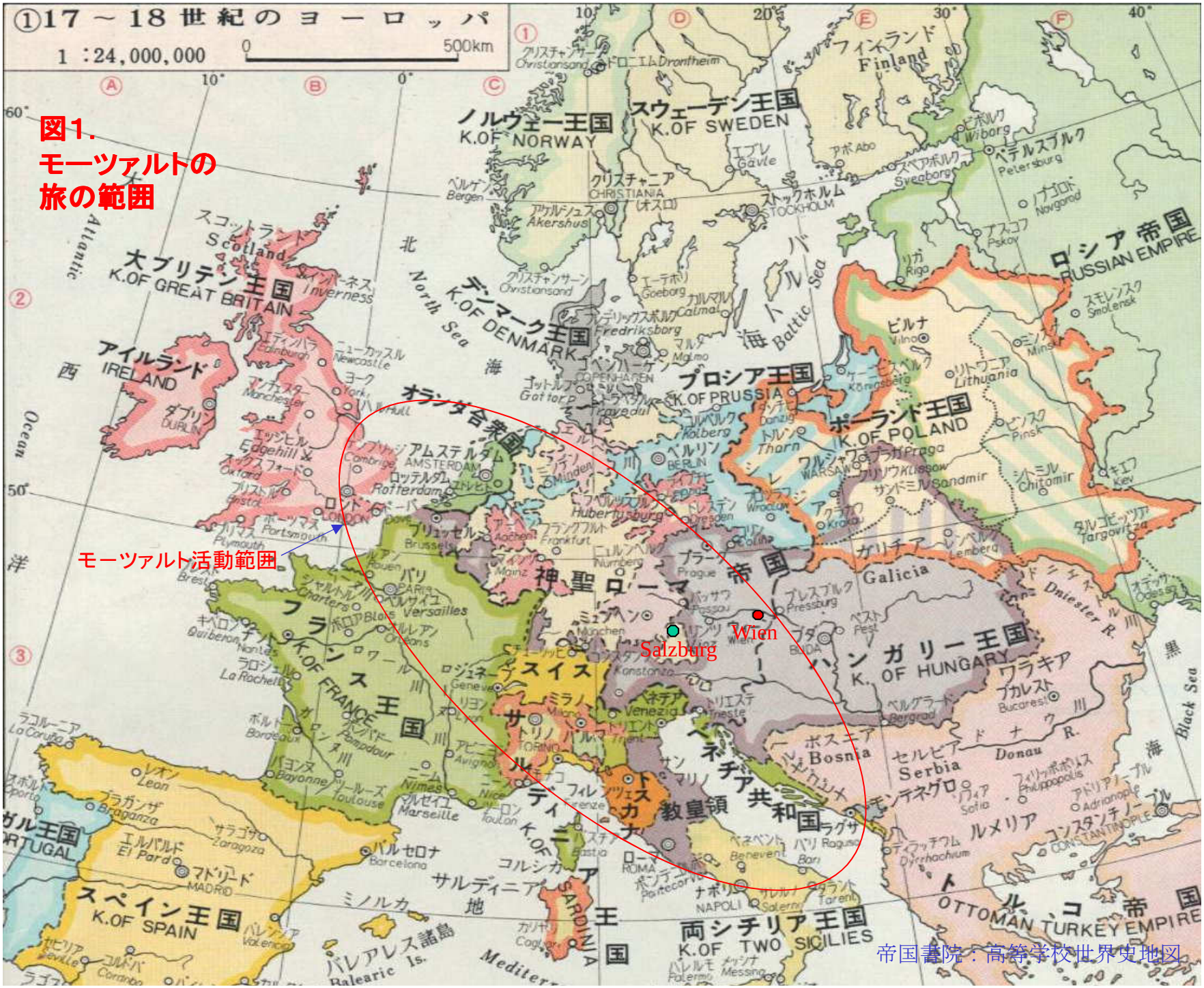
ナンネルとモーツァルト

モーツァルトの生家
（開いた窓の部屋）

父　レーオポルト・モーツァルト

Year	Age	出来事・旅行等　○:旅行番号					在住・活動拠点
1756		1月27日8am**モーツァルト誕生**、父レーオポルト「ヴァイオリン教程」出版					
1757	1	父レーオポルト「宮廷内作曲家」の称号					
1758	2	父レーオポルトザルツブルグ宮廷楽団次席ヴァイオリン奏者					
1758	3	父レーオポルトナンネルの楽譜帳、ヴォルフガング					
1760	4	クラヴィアのレッスン始まる。					
1761	5	クラヴィアのレッスン続ける。					
1762	6	ミュンヘン旅行1①					
		ウイーン旅行1②					
1763	7	帰郷、レーオポルト宮廷楽団の副楽長					
		西方への大旅行③					
1764	8	英国に渡る					
1765	9						
1766	10	アムステルダム訪問					
		パリ訪問、帰郷					**Salzburg**
1767	11	ウイーン旅行2④					
1768	12						
1769	13	帰郷					
		父とイタリア旅行1⑤					
1770	14						
1771	15	帰郷					
		イタリア旅行2⑥					
1772	16	イタリア旅行3⑦					
1773	17	ウイーン旅行3⑧					
1774	18	ミュンヘン旅行2⑨					
1775	19						
1776	20						
1777	21	母とマインハイム・パリ旅行(母客死)⑩					
1778	22						
1779	23	帰郷					
1780	24	ミュンヘン旅行3⑪					
1781	25	**ウイーン定住**					**Wien**
1782	26	**コンスタンツェと結婚**					
1783	27	ザルツ帰郷⑫					
1784	28	ナンネル結婚				**次男カール誕生**	
1785	29	父ウイーン訪問					
1786	30			フィガロの結婚			
1787	31	プラハ招待1⑬、プラハ再訪2⑭		アイネクライネナハトムジーク			
1788	32			交響曲39,40,41			
1789	33	リ公爵とプラハ、ドレスデン、ライプツィヒ、ポツダム、ライプツィヒ再訪⑮					
1790	34	フランクフルト訪問⑯		コシファントゥッテ、			
1791	35	ジスマイヤーとプラハ訪問⑰		魔笛、レクイエム		**四男フランツ・クサヴァー誕生**	
		12/5　0:55**モーツァルト死亡**					

表1
モーツァルトの
生涯と旅年表


①17～18世紀のヨーロッパ
1 :24,000,000
0
500km
図1.
モーツァルトの
旅の範囲
モーツァルト活動範囲
Salzburg
Wien
ノルウェー王国
K.OF NORWAY
スウェーデン王国
K.OF SWEDEN
フィンランド
Finland
ロシア帝国
RUSSIAN EMPIRE
大ブリテン王国
K.OF GREAT BRITAIN
スコットランド
Scotland
アイルランド
IRELAND
デンマーク王国
K.OF DENMARK
プロシア王国
K.OF PRUSSIA
ポーランド王国
K.OF POLAND
オランダ合衆国
神聖ローマ帝国
フランス王国
K.OF FRANCE
スイス
ハンガリー王国
K. OF HUNGARY
ガリチア
Galicia
ワラキア
ボスニア
Bosnia
セルビア
Serbia
モンテネグロ
ルメリア
トルコ帝国
OTTOMAN TURKEY EMPIRE
ポルトガル
PORTUGAL
スペイン王国
K.OF SPAIN
サルディニア王国
K.OF SARDINIA
両シチリア王国
K.OF TWO SICILIES
教皇領
ヴェネチア共和国
North Sea
Baltic Sea
Atlantic Ocean
Black Sea
Mediterr
Donau R.
Dniester R.
Balearic Is.
帝国書院：高等学校世界史地図

（２） モーツァルトの17回の旅　　文献4）海老沢敏監修「モーツァルト事典」 より要約

① M1：ミュンヒェン旅行（父姉息子3人）：1762年1月12日(6歳)ザルツブルク出発
父、姉とともに３週間ミュンヒェンに滞在し、選帝侯マクシミーリアーン3世ヨーゼフの御前で姉弟2人が演奏し評判を得る。1月から7月の間に、クラヴィーアのための小品K2～K5が生まれる。→（選帝侯へのアクセス、娘と息子の天才現象のPresentation開始。大成功でレーオポルトの自信拡大、収益大）

② W1：ウイーン旅行（家族旅行）：1762年9月18日出発(6歳)-1763年1月5日帰郷(7歳)　シェーンブルン宮殿の女帝マリーア・テレージアや皇帝を伺候。「神童モーツァルト」の名はウイーン中に鳴り響く。→（シェーンブルン宮殿での演奏、レーオポルトの自信拡大（モーツァルトの実力確認とマネージャー経営手腕）、モーツァルトの自信の萌芽）

③ S1：西方への大旅行（家族旅行）：1763年6月9日出発(7歳）-1766年11月29帰郷(10歳)　♥ http://www.youtube.com/watch?v=5SyTWrF6dt4　図２－１
馬車でザルツブルクを出発。ミュンヒェン、アウクスブルク、ハイデルベルグ、マインツ、フランクフルト、ボン、ケルン、ブリュッセルに立ち寄り姉弟の演奏を披露、評判を得る。**パリでは**、ヴェルサイユにルイ15世を拝謁、多くの貴族や音楽家と会い公開演奏会を開催し評判を得る。ヨハン・ショーベルト、ヨハン・ゴットフリート・エッカルトをはじめフリードリッヒ・メルヒオル・グリムなど著名な音楽家を訪問する。クラヴィーアのための小品を作曲し、フランス王女ヴィクトワール・ド・フランス夫人等に献呈。（「クラヴィーアとヴァイオリンのためのソナタ」K6,7,8,9など）

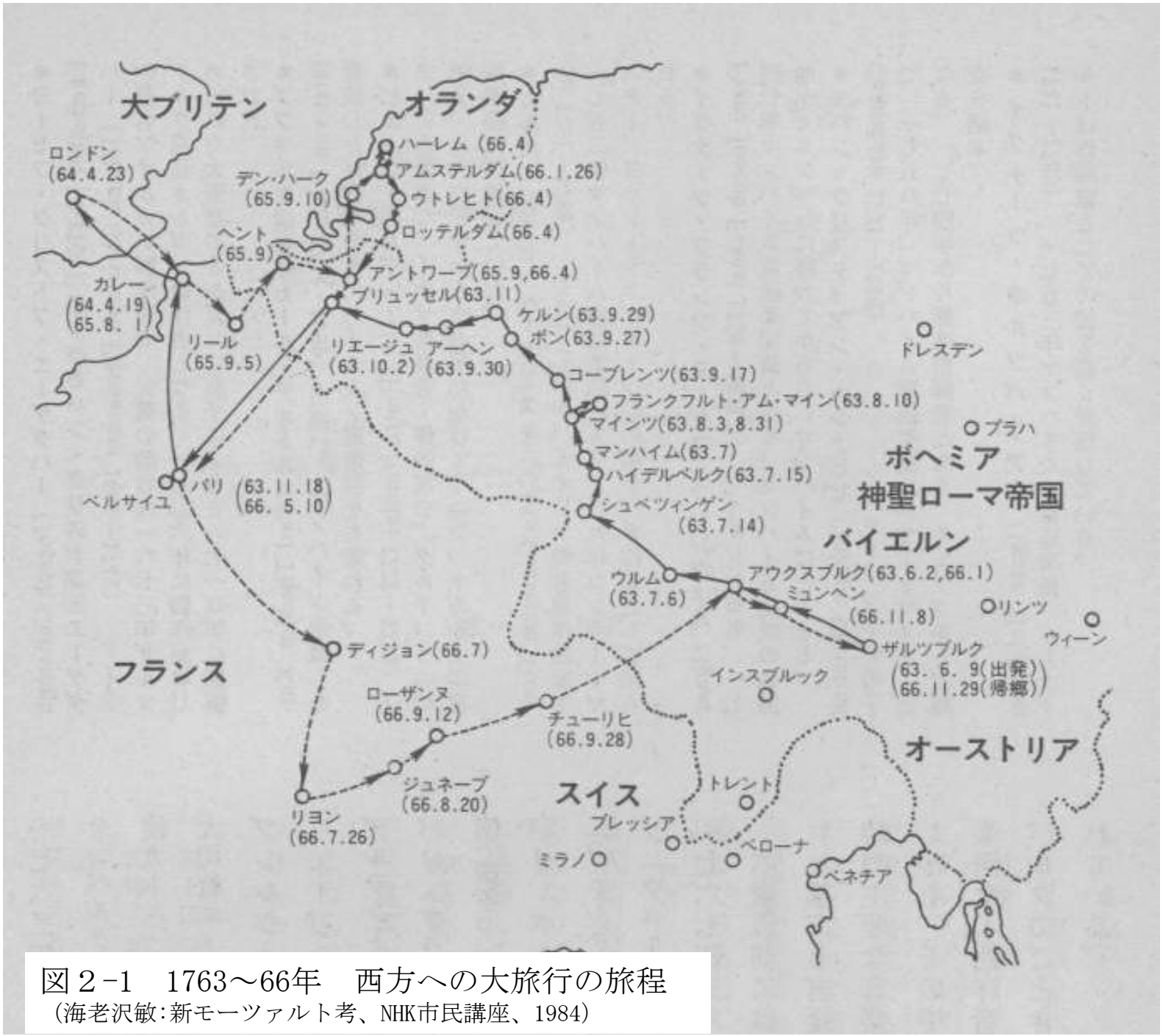


図２-1　1763～66年　西方への大旅行の旅程
（海老沢敏:新モーツァルト考、NHK市民講座、1984）

ロンドンでは、国王ジョージ3世と王妃に3度、謁見。「クラヴィーアとヴァイオリンのためのソナタ」K10～15を作品3として出版し英国王妃シャーロットに献呈。ロンドンで作曲されたモーツァルトの最初の交響曲K16,19が披露された。ヨハン・クリスチャン・バッハと知り合う。公開演奏会を開き評判となる。「ロンドンの練習帳」が生まれる。7月に大英博物館を訪問し、パリとロンドンで出版したソナタ集、モーツァルトの最初の教会音楽作品であるモテットK20の自筆譜を寄贈。この間、レーオポルトが重病となる。帰途、**オランダ**訪問、オランニエ公を伺候。公開演奏会を開く。モーツァルト、レーオポルトが病気になる。ナンネルが重症のチブスに罹り臨終の秘蹟をうけるが奇跡的に回復する。モーツァルトも重病となる。ナッソウ＝ヴァイルブルグ侯妃に依頼された「クラヴィーアとヴァイオリンのためのソナタ」K26～31を作品4として出版し侯妃に献呈する。再び、パリに戻りヴェルサイユ訪問。ミュンヒェンの選帝侯の御前で演奏、3年半ぶりに帰郷する。→（天才現象を国外にアピール、レーオポルトのマネージメント、モーツァルトの神童ぶり、国王各界を訪問し驚愕の評判、作曲/献呈/寄贈）

④　W2：ウイーン旅行（家族旅行）：1767年9月11日出発（11歳）-1769年1月4日帰郷（13歳）

♥ http://www.youtube.com/watch?v=CJAlU-jNpDo

皇女ヨーゼファの婚儀の祭典をめざしてウイーン旅行に発ったが、ウイーンでは天然痘が大流行し、皇女ヨーゼファが死亡。モーツァルト一家はブルノへ避難。シュラッテンバッハ伯爵らを訪ねる。モーツァルトに天然痘の兆候。ついでナンネルが天然痘になる。2ヵ月半後の1768年1月、女帝マリア・テレージアに謁見。皇帝ヨーゼフ2世にオペラ「ラ･フィンタ・センプリチュ」K51の作曲を勧められる。9月、このオペラの公演阻止にあう。メスマー博士から依頼された「バスティアンとバスティエンヌ」K50が初演される。ランバッハ修道院を訪問し交響曲2曲（「ランバッハ交響曲」）を贈呈した。→（皇帝からのオペラ作曲依頼、公演阻止に遭う実力、奉納、作曲、贈呈）

⑤　I1:イタリア旅行（父子旅行）：1769年12月13日出発(13歳）-1771年3月28日帰郷(15歳）　♥　http://www.youtube.com/watch?v=unElSoYs12s　　図２－２

インスブルック、シュタイナハ、ヴォーツェン、ロヴェレートを経て27日、ヴェローナに着く。当地で最初の演奏会をアッカデーミア･フィラルモニカで開催し評判となる。古代ローマの円形劇場アレーナを見学。マントヴァ着。アッカデーミア･フィラルモニカのテアトリーノで開催された定期演奏会で大成功。ミラーノではニッコロ・ピッチーニの新作オペラ「エジプトのシーザー」の練習に立会い面識となる。ジュバンニ・バッティスタ・サンマルティーニと面識になる。モーツァルトの演奏を聴くためにミラーノに着いたモディーナ大公父娘を祝してオペラ、舞踏会や演奏会が開かれる。フィルミアーン伯爵邸から贈られたメタスタージョ全集からテキストをとって、アリア3曲とレチタティーボ1曲を作曲。「ポントの王ミトリダーテ」の作曲依頼

ボローニャでは元帥チェントゥリオーニ伯爵邸に伺候。150人もの貴族が招待されたモーツァルトの演奏会が開催され大評判を得る。ボローニャ滞在中に2回、大音楽理論家ジャンバッティスタ･マルティーニ師を訪問、作曲指導を受ける。フィレンツェではトスカーナ公レーオポルトに謁見。ヴァイオリン奏者ピエートロ・ナルディーニと共演し腕前を披露する。ロンドンで知り合ったカストラート歌手ジョバンニ・マンツォーリを訪問。また英国少年とヴァイオリンを興じ合う。

ローマでは、スティーナ礼拝堂でグレゴーリオ･アッレーグリの「ミゼーレ」を聴く。教皇、王侯貴族、音楽家など多くの人を訪問する。その後、アッピア街道を南下してナポリに行く。連日、王侯貴族、歌手、外交官を訪問、招待を受ける。ナポリ王国首相タヌッチ侯爵やヨメッリ等多くの音楽家に会う。ネロ帝の浴場やヴィーナスの神殿、ヴェズーヴィオ火山登山、ポンペイとエルコラーノ遺跡訪問などめずらしく旅行らしい観光をしてローマに帰る。教皇クレメンス14世から黄金拍車勲章を受章する。

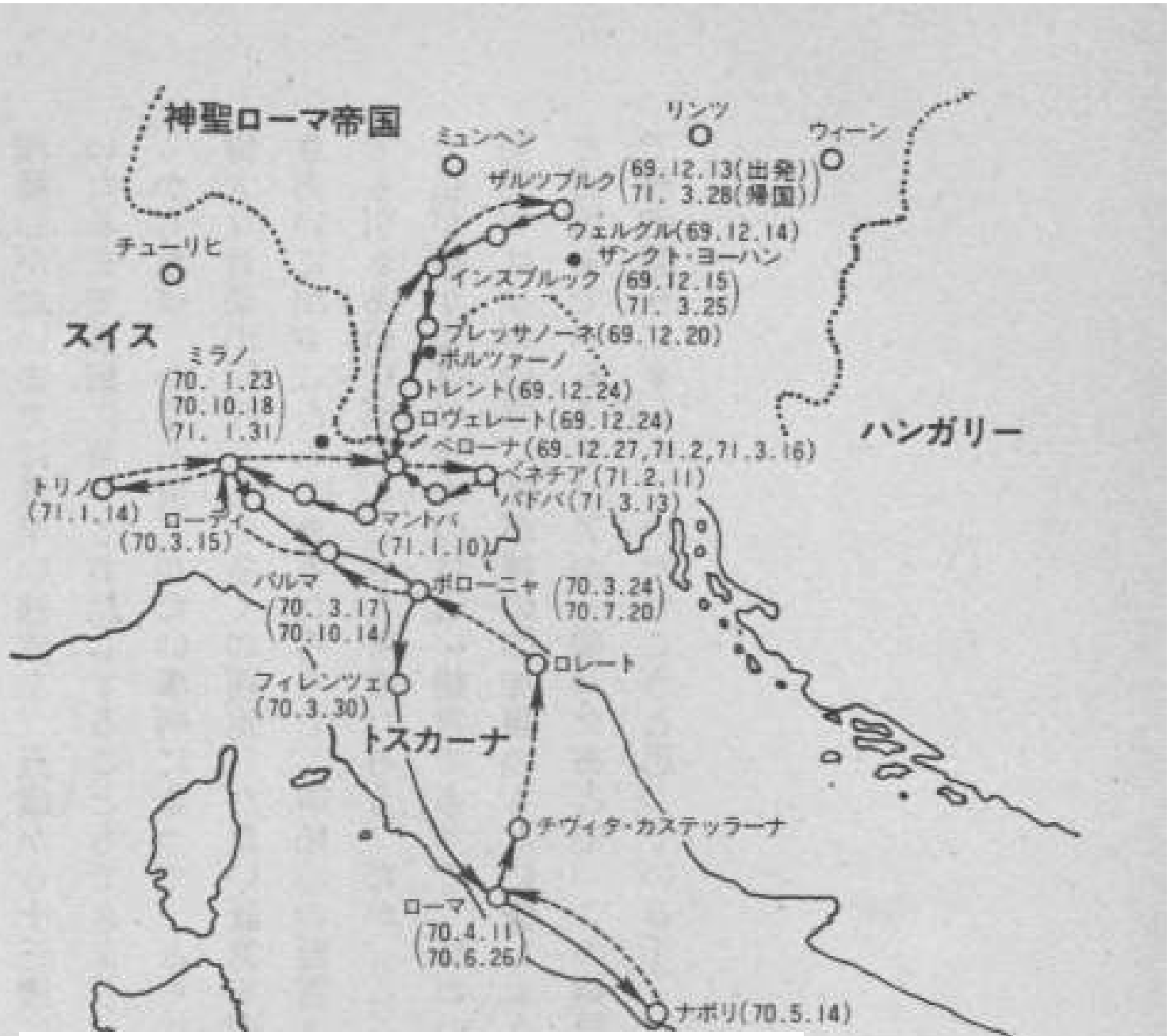


図２－２　1769～71年　第１回イタリア旅行の旅程（海老沢敏:新モーツァルト考、NHK市民講座、1984）

ボローニャに戻り、ミラーノで上演のための「ポントの王ミトリダーテ」の台本を受けとり作曲を開始する。マルティーニ師の許で対位法など音楽理論を学ぶ。アッカデーミヤ・フィラルモニカの試験を受け会員となる。「ポントの王ミトリダーテ」がミラーノ大公家宮廷劇場で初演、大成功。ヴェローナのアッカデーミヤ・フィラルモニカから名誉楽長の称号を授かる。トリノ、ミラーノを経てヴェネツィアに着く。オペラ観劇、招待が続き、多くの貴族を訪問する。ミラーノで上演されるオペラ「ルーチェ・シッラ」K135の作曲の契約をする。「救われたベトゥーリア」K118の作曲を依頼される。→（音楽の都、オペラの都を訪問・鑑賞、音楽家との交流、人脈の形成、競演等武者修行、招待、旅行らしい観光、名師からの指導、受賞、オペラを作曲して発表、オペラ作曲の依頼受ける。）

http://www.youtube.com/watch?v=34ESUf8qLEs

⑥　I2:イタリア旅行（父子旅行）：1771年8月13日出発(15歳）-1771年12月15日帰郷(15歳)

ミラーノで「アルバのアスカーニョ」の台本を受け取り作曲にとりかかる。モーツァルトと共にオペラを依頼されたたハッセを訪ねる。モデーナ大公女に拝謁。

→（オペラ作曲、大音楽家との交流）

⑦　I3:イタリア旅行（父子旅行）：1772年10月24日出発(16歳）-1773年3月12日帰郷(17歳)

ヴェローナでオペラ鑑賞。ミラーノで「ルーチョ・シッラ」の作曲開始。大公家宮廷劇場でフェルディナント大公と大公妃臨席のもとで大成功を収める。フェルディナント大公の下での就職運動をするが失敗。父親もトスカーナ大公レーオポルトにモーツァルトの就職運動をするが失敗。

→（オペラ作曲、公演大成功、就職失敗、レーオポルトの実力上がらず）

⑧　W3:ウイーン旅行（父子旅行）：1773年7月14日出発(7歳）-1773年9月26日帰郷(17歳)

F:¥Mozart Trip mpg¥CIMG0011J-Wien1773.AVI

ベルンハルト博士、メスマー博士らと旧交あたためる。女帝マリア・テレージアに謁見。ウイーン来訪中の大司教コロレードに拝謁し休暇延長の許可をもらう。音楽家や著名人を訪問。（この頃、モーツァルト一家はゲトライデガッセの生家からハンニバル広場(現マカルト広場8番地にある大きな住家）に引っ越す。→（女帝マリア・テレージアに謁見、大司教コロレードに拝謁、音楽家著名人訪問、ハンニバル広場住家に転居）

⑨M2:ミュンヒェン旅行（父子旅行）：1774年12月6日出発(18歳）-1775年3月6日帰郷(19歳)

オペラ「偽りの女庭師」K196の初演が延期となる。作風が所謂「ギャラント・スタイル」に向かう。「偽りの女庭師」が選帝侯臨席のもとに、初演大成功を収める。音楽愛好家貴族男爵の依頼で所謂「デュルニッツ・ソナタ」K284

♥ http://www.youtube.com/watch?v=5JrAOMiARkAを作曲。→（オペラ「偽りの女庭師」初演、作曲、作風発展）

⑩　MP1:マンハイム・パリ旅行：母子旅行　777年9月23日出発(21歳）-1779年1月中旬帰郷(23歳)

バイエルン選帝侯マクシミーリアン3世ヨーゼフに謁見、就職運動をするが失敗。アウクスブルクで従妹ベーズレと初めて会い滞在中しばしば会う。マンハイム到着。西方の大旅行で面識となったクリスチャン・カンナビヒやヨハン・バプテスト・ヴェンドリンクをはじめ、数多くのマンハイム宮廷音楽家を訪問。選帝侯妃に拝謁、選帝侯カール・テオドールの宮殿で音楽会、喝采を受ける。侯から娘カロリーネ・ルイーゼのために作曲を依頼され、「クラヴィーアのためのロンド」K^{6}284fを作曲。オルガン演奏や侯の息子にレッスンして就職活動するがここでも失敗に終わる。父レーオポルトは手紙でマンハイムを出て旅を続行するように命じるがモーツァルトは留まる。写譜家**フリードリン**

・**ヴェーバーの一家**と親しくなり、次女のオペラ歌手**アロイージアに惹かれる**。ヴェーバー父娘とともにオランニエ公妃の御前でアロイージアとともに演奏する。マンハイムに戻る。旅行計画について父親と意見が食い違う。モーツァルト作品の音楽会が開かれ、モーツァルトとアロイージアが演奏し大喝采を受ける。アロイージアのために「**レチタティーボとアリア**」K294を作曲。♥ http://www.youtube.com/watch?v=i1Rr-H6V4Og ♥ パリには1778年3月に到着。グリム男爵やジッキンゲン伯爵を始め多くの貴族や音楽家を訪問する。ド・ギーヌ公爵令嬢に作曲を教える。父子のために「フルートとハープのための協奏曲」K299を作曲する。母親マリア・アンナが体調を崩す。仕事が軌道に乗る。ヴェルサイユ宮廷礼拝堂オルガニストの地位が提供されるが断る。6月中頃、母親が病床に着く。「パリ交響曲」K297 ♠ http://www.youtube.com/watch?v=mMvv2-0bXXQ ♠ がコンセール・スピリチュエルで初演され喝采、再演が繰り返される。母親の病状が悪化する。7月3日、母親マリア・アンナ死去。サン・トゥスタシュ教会で葬儀が行われ、教会付属墓地に埋葬された。この頃の作品に短調をとる曲が多い。 「ヴァイオリンソナタホ短調」（K304） ♣ http://www.youtube.com/watch?v=HFRL1kCC3Dg

クリスティアン・バッハと再会する。父親の努力でザルツブルク宮廷へのモーツァルトの復職。パリの就職活動も失敗。アロイージアに会うために父の反対に背いてマンハイムに向かう。マンハイムに到着するがアロイージアはミュンヒェンに向かった後で再会できなかった。レーオポルトは再三ザルツブルクに帰郷を命ずる。ミュンヒェンに行きアロイージアに再会するが失恋する。モーツァルトの求めによりベーズレがミュンヒェンに来る。選帝侯にパリで版刻させた「ヴァイオリン・ソナタト長調」K301♦ http://www.youtube.com/watch?v=TDym4V0pvyEを献呈する。→（母子旅行、マンハイム宮廷音楽家との交流、モーツァルト独立の兆し、アロイージアとの初恋と失恋、母親客死、作曲/公演、レーオポルトの帰郷命令無視・モーツァルトへの影響力低下）

⑪　M3：ミュンヒェン旅行（父姉旅行）：1780年11月5日出発(24歳）-1781年5月9日ウイーン着(25歳)

♥　http://www.youtube.com/watch?v=M4zqkojgk7U

オペラ「クレータの王イドメネーオ」K366の仕上げのためにミュンヒェンを訪問する。ミュンヒェン劇場で「イドメネーオ」がカンナビヒの指揮で初演される。

ウイーン滞在中の大司教コロレードの命令によりウイーンへ向かう。大司教の叔父カール・コロレード伯爵邸(ドイチェス・ハウス)に滞在。再び、ヴェーバー家との交際が始まる。音楽芸術家協会音楽会で演奏し大好評を得る。大司教より22日にザルツブルクに向けて出発すべしとの命令が下る。ドイチェス・ハウスでの最後の音楽会にて好評を得る。ヴェーバー家に引っ越す。再び出発すべしとの命令が下る。出発日のことで大司教と決裂し、ウイーン定住を決意する。

父レーオポルトが息子の決意を翻させようとする。6月8日アルコ伯爵と話し合うが伯爵から足蹴にあい、解雇状を受けとる。

ウイーン定住が始まる。

ウイーンでは父に許されぬままコンスタンツェと結婚してしまう。
→（オペラ「クレータの王イドメネーオ」K366の仕上げと初演、コロレードの命令破棄、ヴェーバー家との交際、音楽会で好評、モーツァルト独立の自信、大司教と決裂、解雇状、レーオポルトは制御不可能に、コンスタンツェと結婚、ウイーン定住に）

⑫　Z1：ザルツブルク帰郷旅行：1783年7月末出発(27歳)-1783年12初めウイーン着(27歳)

故郷ザルツブルクを訪問、妻コンスタンツェを父親レーオポルトと姉ナンネルに紹介。在郷の友たちと旧交を暖める。ザルツブルク聖ペテロ教会で「ハ短調ミサ曲」K427　♥ http://www.youtube.com/watch?v=20hyMGiuwqY ♥が演奏され、ソプラノのパートをコンスタンツェに歌わせる。「リンツ交響曲」K425が初演された。長男ラインムント死亡→（コンスタンツェとの里帰り、父子雪解けならず、モーツァルト苦悩）

⑬　P1：プラハ旅行：妻と義兄ホーファー　♥ http://www.youtube.com/watch?v=e5RAntdWuCs

1787年1月8日出発(31歳）-1787年2月12日ウイーン着(31歳)

「フィガロの結婚」の圧倒的人気によりプラハに招待される。モーツァルト夫妻が列席して「フィガロの結婚」が上演。プラハ国立劇場にてモーツァルトの音楽会が開催され、「プラハ交響曲」が初演される。自ら「フィガロの結婚」を指揮する。ヨハン・パハタ伯爵から依頼されて「６つのドイツ舞曲」K509を作曲。興行師ボンデーニから「ドン・ジョバンニ」K.527を依頼される。→（「フィガロの結婚」上演でプラハ招待旅行、「ドン・ジョバンニ」K.527を依頼）

⑭　P2：プラハ旅行：夫妻旅行　♥ http://www.youtube.com/watch?v=B4jxUqxs-UA

1787年10月1日出発(31歳）-1787年11月16日ウイーン着(31歳)

皇帝ヨーゼフ2世の妹マリーア・テレージア皇女と婚約者ザクセン公のプラハ訪問の祝典公演で「フィガロの結婚」をモーツァルトの指揮で演奏。「ドン・ジョバンニ」初演、大成功を収める。　→「フィガロの結婚」をモーツァルト自らの指揮で演奏、「ドン・ジョバンニ」初演、大成功　F:¥Mozart Trip mpg¥CIMG0019Berlin 1879.AVI

⑮　L1：プラハ・ライプツィヒ旅行：リヒノフスキー公爵同伴

1789年4月8日出発(33歳）-1789年6月4日ウイーン着(33歳)

ザクセン選帝侯フリードリッヒ・アウグスト3世と妃アマーリエを伺候、侯妃の間で行われた音楽会で「クラヴィーア協奏曲K537」を演奏する。ライプツィヒ着、聖トーマス協会でオルガンの即興演奏。ポツダムに着いてプロイセン国王フリードリッヒ・ヴィルヘルム2世に謁見を願い出るが、代理として宮廷音楽総監督のデュポールがモーツァルトに会う。「デュポールのメヌエットの主題による9つの変奏曲」K573を作曲。ライプツィヒ帰着。ゲヴァントハウスでモーツァルトの演奏会が開催される。ベルリン着王立劇場での「後宮からの誘惑」の上演に立会。皇后の御前で演奏し、国王フリードリッヒ・ヴィルヘルム2世からは弦楽四重奏曲6曲（いわゆる「プロイセン王四重奏曲」で3曲だけが完成）と王女のためのピアノソナタ6曲(1曲だけが完成)の作曲を依頼される。　→（家計窮乏対策旅行、作曲依頼）

⑯　FM：フランクフルト・マンハイム旅行：義兄ホーファー：　**1790年9月23日出発（34歳）-1790年11月10日ウイーン着(34歳)**

収入の道を得るために義兄ホーファーとともに、10月レーオポルト2世の戴冠式が行われるフランクフルト・アン・マインに向けて出発。選帝侯の御前で演奏して大喝采を得る。23日マンハイムで「フィガロの結婚」初演に立会い。

→（モーツァルト不人気、家計窮乏、赤字旅行にでかける。）

⑰　P3：プラハ旅行：1791年8月24か25日出発(35歳）-1791年10月16日ウイーン着(35歳)

コンスタンツェと弟子ジスマイヤーの３人で出発。モーツァルト指揮の「ドン・ジョバンニ」が上演される。「皇帝ティートの慈悲」完成、プラハ国立劇場にてモーツァルトの指揮で初演。プラハのフリーメイソン分団「ツァ・ヴァールハイト・ウント・アイニッヒカイト」（真理と和合）を訪問。→（「ドン・ジョバンニ」と「皇帝ティートの慈悲」が上演、フリーメイソン分団）♥

http://www.youtube.com/watch?v=oaaqL9oz98A&list=RDDyT6fEhXL9w

モーツァルトの17回に及ぶ大小さまざまな旅は馬車と船により行われた。旅の多様な訪問先と旅の内容のレベルの高さ（国王、王妃、皇太子、皇女に謁見、披露、名音楽家との交友など）に圧倒される。旅に次ぐ旅にも拘らずモーツァルトは1,000曲もの名曲を残した。

(3)　モーツァルトの旅年表と出張期間の分布（図３）

１）膨大な「モーツァルトの旅」：旅程距離の推定

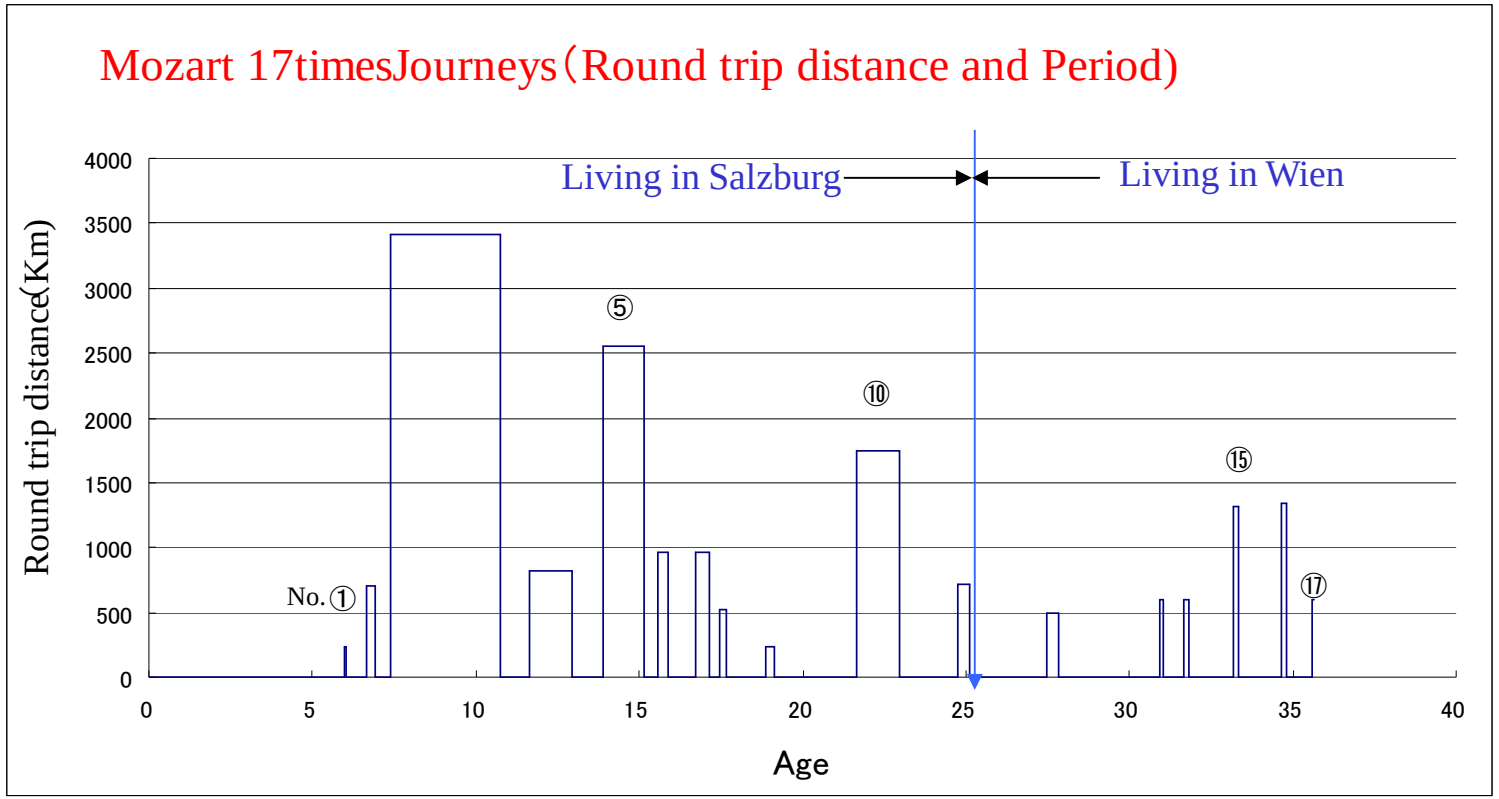
膨大な「モーツァルトの旅」を実感するためにその“旅の大きさ”を定性的、定量的に求めてみる。そのパラメータは、①旅程距離数と②期間である。前節（２）モーツァルト17回の旅と公開されている旅程情報から“旅の大きさ”分布図を作成した。

a)　「モーツァルトの旅」の大きさ：図３

図3は縦軸に旅の移動距離、横軸にモーツァルトの生涯年数を定義し、17回の旅の距離を出発/帰郷時期に対応させて作画したものである。矩形分布（面積）は“旅の大きさ（困難度：距離×期間）”と見做せる。 図3の右側に各旅の移動距離を示した。17回の旅の積算全移動距離は約17,820km※) と推定できる。これは地球の赤道周長約4万kmの約45%となる。鉄道が無く馬車や船にたよった当時の旅としては驚くべき旅程距離である。最大の旅は西欧への大旅行(3,410km）であり、第1回イタリア旅行、マンハイム･パリ旅行がそれに続く。　※) 旅程記録から経由各都市を地図帳にプロットし区分積算して推定

b）出張期間と出張比率(累積出張日数の全生涯日数に対する比率)

横軸の矩形底辺の長さ（出発 - 帰郷期間）の累積合計から出張総日数を求めると3,703日（約10年）となる。一生涯日数を計算すると略13,088日となり、**生涯日数に対する累積出張日数の割合(出張比率)**は28.3%となる。定義を変えて5歳以上を旅行可能な**有効生涯日数**（モーツァルトは６歳から家族旅行に出発）とすると、それは



No.	行き先	往復
1	Munchen 1	240
2	Wien 1	700
3	西方大旅行	3,410
4	Wien 2	820
5	Italy 1	2,550
6	Italy 2	960
7	Italy 3	960
8	Wien3	520
9	Munchen 2	240
10	Mannheim,Paris	1,740
11	Munchen 3	720
12	Salzburg帰郷	500
13	Praha(P) 1	600
14	Praha 2	600
15	P,Leipzig,Berlin	1,320
16	Frank.-Mannheim	1,340
17	Praha 3	600
	合計(往復;km)	17,820

Fig.　3　Mozart 17timesJourneys

11,263日（＝13,088 - 1,825）となり、**出張比率は33%**と驚くべき数字となる。これは人生の三分の一（つまり、自宅２日に出張1日の割合）であり、驚異的な旅の割合といえる。昨今の会社の出張で時折見られる数年単位の長期外国駐在や個人的趣味での長期滞在とは異なり、モーツァルトの旅は長期滞在型ではなく、馬車や船によって常時移動する「渡り鳥的旅行」である。精神的・肉体的疲労が夥しく蓄積したことであろう。苦労のほどが忍ばれる膨大な旅であった。

c)ザルツブルク時代とウィーン時代の出張分布の特徴

モーツァルトの旅は、ザルツブルク時代とウィーン時代に分けられる。**ザルツブルク時代**の25年間の旅行回数は、表1に見るように非常に多い。この期間の出張比率を計算すれば概略、50%となる。幼年・少年時代の旅は出張回数、遠距離、長期間のいずれをみてもザルツブルク時代の旅は極端に過酷であったことがわかる。天才児モーツァルトの宣伝のためにレーオポルトの積極的マネージメントが回を追うごとに増幅してくる。**ウィーン時代**になると、出張頻度も減り、近距離で短期間の旅行となるので、出張比率はかなり減少している。

d)膨大なモーツァルトの曲はどこで書かれたのか

有効生涯日数11,263日から累積出張日数は3,703日を引くと累積在宅日数は7,560日となる。仮に作品数を1,000曲とし、在宅時に作曲したとすれば、7日（8時間労働で56時間）に1曲の割合で作曲したことになる。殆どが名曲で長大なオペラも多い。ピアノレッスン、演奏会、雑談、遊び、散歩、病気などを考えると、驚くべき作曲速度である。在宅、出張期間を含めた有効生涯日数11,263日で考えても11日に1曲の割合で名曲が生まれたことになる。旅の途上で多くの曲が作られたのであろう。

２）「モーツァルトの旅」の分析と特徴

表1、図１～図3を眺めながら、前述のモーツァルトの旅を再読すると、モーツァルトが旅の途上で体験したに違いない「人生の楽しみ、苦しみ、悲しみ、憎しみ、歓喜、憐れみ・・・」等の感情がひしひしと伝わってくる。
「モーツァルトの旅」を幾つかの側面から定性的に分析、整理してみよう。

a）旅の出発点：ザルツブルクとウィーン
0歳～25歳（1756-1781）の旅はザルツブルク時代（独身時代の旅）であり、**25歳～35歳（1781-1791）の旅**はウィーン時代でコンスタンツェとの結婚から死までの旅である。

b）　父子関係：レーオポルトがモーツァルトを管理した前半の時期と父から独立した後半の時期に分けられる。その境目は　a)と同じく、ザルツブルク時代からウィーン時代に移った時期であり、それは第3回ミュンヒェン旅行（24歳）と第4回ウイーン旅行（25歳）の間にあたる。発端はコロレード大司教によるモーツァルトの音楽旅行の無理解と唐突な帰郷命令、さらにこれに関する父親との意見の対立にあると思われる。西欧世界はフランス革命前の市民台頭への時代で、音楽も貴族階級のための時代から市民のための時代へと大きく変わりつつあり、その渦中にモーツァルトはいたのである。

モーツァルトと父は一卵性的父子関係のようであった。少年時代のモーツァルトは父レーオポルトが大好きで尊敬していたといわれる。13歳から16歳の少年期に行われた3回の長期のイタリア父子旅行はそれを良く示している。　”アマデウス・モーツァルト点描”（ハーバート・クッファーバーグ著　横山一雄訳）によると、
「生物学的、心理学的、また音楽的な面でヴォルフガングは、父レーオポルトなしにはあり得なかったであろう。父親と息子の相互作用は人間現象の極めて不可解かつ興味

ある一面だが、その複雑な関係をモーツァルト父子ほどあざやかにみせている例はめったにないと言っていい。・・・・」と述べている。

c)　旅の性質：

ザルツブルク時代の旅は天才モーツァルトのデビュー・見世物的旅回り演奏、売り込み旅行で、皇帝、貴族と親交を得る人脈形成の旅であった。演奏のみならず研修・修学に力を尽くし顕彰も受けた。作曲依頼が増え当地での製作や帰郷後に製作し改めて納品旅行をするケースも増えた。1777年のパリ・マンハイム旅行を境にレーオポルトの指導力が衰退、モーツァルトも独立を意識した旅行となった。
ウィーン時代の旅はフリーランス音楽家として生計を立て、コンスタンツェを連れたザルツブルク里帰り以降、招待公演、収入対策のための公演など短期間で近距離の旅となった。

d）旅の参加者：

ザルツブルク時代**の**初期では**家族旅行**が多く父レーオポルトが計画し引率した。①第1回ミュンヒェン旅行（6歳）、③西欧への大旅行、④第2回ウィーン旅行などである。**父子旅行**は⑤、⑥、⑦のイタリア旅行（第1回～3回）である。モーツァルトの人生上の転機となる⑩マンハイム･パリ旅行は珍しく母子旅行であった。

ウイーン時代では**夫婦旅行**は⑬, ⑭, ⑰のプラハ旅行で、他は友人との旅行である。モーツァルトの単独旅行は⑪ミュンヒェン旅行(途中父と合流するが)のほかは皆無なのも特徴的である。

e)　人生の転機となった旅：

ｉ）マンハイム・パリ旅行（21～22歳）：

レーオポルトのコントロールからの独立、母親の客死による人生的試練、ヴェーバー家“アロイージアとの失恋”と“妹コンスタンツェとのめぐり会い”があった。

ⅱ）第3回ミュンヒェン(第4回ウイーン)旅行（25歳）：

コロレード大司教との決裂、ザルツブルクを捨てウイーン定住の決意をした。

ⅲ）ザルツブルク里帰り旅行（27歳）：モーツァルトは新婦コンスタンツェを伴い帰郷、教会で妻の歌唱力を披露。レーオポルトやナンネルとの関係改善に努めた。しかし、修復できなかった。仲の良かったナンネルとはその後、会うことはなかった。

f)強健な体力：当時、遠方への旅行は馬車と船が使用された。整備の良くない馬車道を来る日も来る日も揺られながら旅をしたのであろう。6歳から始められた長距離の馬車旅行に耐えた幼いモーツァルトの強健な体力は一体、どこからきたのであろうか。ヨーロッパの鉄道敷設はモーツァルトの死後約45年後の1837年頃でこの科学技術の恩恵に浴していない。当時の交通機関は馬車、川舟、渡海船であり旅行はいつも命懸けであった。

モーツァルト家の出生児は３男４女であったが２男３女は生まれて間もなく早世し成人したのはナンネルとヴォルフガングのみある。ナンネルは78才まで生きた。一方、モーツァルトは35歳10ヶ月でこの世を去った。幼い頃から度重なる過酷な馬車旅行がモーツァルトの体を徐々に蝕んだのであろうか。**歴史上の大音楽家と比べて**あまりにも短い生涯である。神戸モーツァルト研究会（故）菅谷明氏の報告によると、調査した164人の大作曲家はほとんどが長寿であり、死亡年齢をみると30代で没した作曲家は、シューベルト(31歳)、ベリーニ(34歳)、モーツァルト（35歳）、メンデルスゾーン(38歳)、フォスター(38歳)、ショパン(39歳)、ガシュイン(39歳)と数えるほどしかいない。モーツァルトの35歳は下から3番目と異常な早世であった。

§３　「旅するモーツァルト」の旅の意義

(1)モーツァルトの旅と一般の旅との比較

①あらゆる形態の旅：

§１（２）「旅」（定義と種類）ではいろいろな立場、種類、目的の旅を抽出した。人は誰しも長い人生の途上でそれらのいずれかの旅をしている。モーツァルトは35年の人生の三分の一を旅で過ごした。彼の生きた18世紀の人間としては到底、考えられないほど遠方かつ広範囲の旅であった。一体、彼の旅は§１（２）で示した「旅」の中のどれに対応するものであったのだろうか。モーツァルトの旅に近いものを選び着色している。その結果、モーツァルトの旅は抽出した大部分の旅に対応していることがわかる。生涯にわたった「モーツァルトの旅」は、職業に密着した「出張」のような旅であったが単調ではなく多種多様な旅行であった。

②モーツァルトは旅を楽しんだのであろうか：

近代の一般的な「旅」は、“楽しさ、リフレッシュ“をイメージする。幼いころの家族旅行といえば、子供は旅の先々で、珍しいもの、おもしろいものなどに興味を引かれて喜ぶ。疲れたら親の背中や腕の中でまどろむ。大人にとってはレジャーは別にして、職業としての旅行、その極端な例である会社の出張であっても、「忙中の閑」として、旅情をそそる車窓からの眺めや都市の光景に一時の楽しみを見出し、名物に舌鼓を打ち、写真やメモをとる余裕が少なからずあるもので、それが後日の思い出となる。モーツァルトの旅はどうだったのか？旅の行動記録や書簡集を読んでも、旅に遊んだ、楽しんだという記述はない。しいて言えば、ナポリを旅したときのネロ帝の浴場やヴィーナスの神殿、ヴェズーヴィオ火山の登山、ポンペイ遺跡訪問の記述だけである。6歳から始まった幼児期の旅でさえも、“楽しみ、喜び、はしゃぐ”といった情景はレーオポルトの手紙の中にも見られない。

③音楽家としての旅：

芸術家の多くはその地方の風土に社会学的、人文学的、経済学的あるいは、自然科学的な興味を求めて旅に出る例が多い。五感への刺激が彼らの精神活動を高揚させ、蓄積された印象がその後の新たな思索や創作へと駆り立てる。メンデルスゾーンやゲーテも旅の後に名作を生んでいる。しかし、モーツァルトは旅に曲想を得て作曲したと言う記述はないようである。

④モーツァルトの旅の途上にあるものはただ、音楽のみであった：

事例を上げてみよう。

➢　初めてのミュンヒェン旅行(1762年、6歳)ではレーオポルトは姉弟を連れて選帝侯マクシミーリアーン3世ヨーゼフに謁見し御前演奏で評判を得た。同年のウイーン旅行では、シェーンブルン宮殿の女帝マリーア・テレージアや皇帝に謁見し演奏した。「神童モーツァルト」の名がウイーン中に広まり幼いモーツァルトの心中に“音楽家としての自信”が芽生えた。思い浮かぶ光景は、はしゃぐ幼いモーツァルトの顔でなく、寄贈された王子の大礼服を着て得意満面で居並ぶ貴族の間をレーオポルトと共に堂々と歩くモーツァルトの大人びた顔である。

➢　第3回目の西方への大旅行(家族旅行：1763-66年、7-10歳）では、御前演奏や公開演奏会だけでなく、大音楽家ヨハン・クリスチャン・バッハと共演し、自作の交響曲を演奏する。さらに驚くことには、モーツァルトは王女たちのために作曲・献呈するという大人顔負けの行動である。

➢　再度のウイーン旅行(家族旅行：1767-69年、11-13歳）で女帝マリア・テレージアに謁見し皇帝ヨーゼフ2世からオペラの作曲を勧められて作曲する。その初演を他の興行者から妨害され、早くも“新進作曲家登場”として恐れられる存在となる。観光や旅に楽しむ暇がないのである。

➢　イタリア旅行（１回目1769-71年:13-15歳）では居並ぶ一流作曲家・音楽家と交流し、公開演奏会だけでなく、本場イタリアで“オペラ”作曲を依頼され滞在中に完成、初演する。一方、名音楽師からの音楽理論を受講･伝授され、名誉楽長の称号の取得、さらに、ローマ教皇クレメンス14世から黄金拍車勲章を受章している。その後もオペラ作曲の依頼と納品、初演のために2回、3回とイタリアに出張している。

➢　第10回目の母と二人で出かけたマンハイム・パリ旅行（1777-79年:21-23歳）では多くの名誉、喜び、悲しみ、怒り、発奮・・などを経験した。選帝侯や宮廷音楽家との交渉と作曲・公演、ヴェーバー家の娘アロイージアとの邂逅、初恋と失恋、母親の客死、それにめげない音楽活動の旅、大司教コロレード公の無理解やレーオポルトの遠隔操縦への反発などである。歓喜と悲哀の極値に達した旅行と言える。

➢　第11回目のミュンヒェン旅行（1800-81年:24-25歳）では大司教コロレード公と決裂を境にウイーンの定住（25歳）。父の許可が得られぬままコンスタンツェとの結婚する。以降の6回の旅に受け継がれる。

（２）モーツァルトが話す旅の意義：

モーツァルトの旅は６歳の時、父レーオポルトに連れられた猛烈・苛酷な旅で始められて以来、人生の1/3をさまざまな旅で過ごしたが、一体、モーツァルトは旅についてどのように感じ、位置づけていたのであろうか。幸い、モーツアルトが22歳の1778年、9月11日付でパリからザルツブルクの父へ送った手紙にそれがうかがえる文章がある。（母と2人で出かけたマンハイム・パリ旅行の後半で書かれた手紙、表1：年表参照）抜粋して読んでみよう。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・ぼくの心の中を打ち明けるなら、ザルツブルクが嫌いな唯一の理由は、土地の人たちとまともな交際が出来ないこと、――音楽がそれほど尊重されていないこと、

———大司教が旅をしてきた聡明な人たちを信用しないことです。———だって、ぼくは断言しますが、旅をしない人は（少なくとも芸術や学問にたずさわる人たちでは）まったく哀れな人間です！———そして、もし大司教が二年ごとに一回の旅を許可してくれないなら、ぼくはどうしても契約を受け入れるわけには行かないと、断言しておきます。凡庸な才能の人間は、旅をしようとしまいと、常に凡庸なままです。———でも、優れた才能のひとは（ぼく自身それを認めなければ、神を冒涜するものです。）———いつも同じ場所にいれば、だめになります。もし大司教がぼくを信頼してくれたら、ぼくはたちまち彼の劇団を有名にしてみせましょう。これは間違いなく本当のことです。———今度のたびはぼくにとって無駄でなかったと誓って言えます。———もちろん作曲の点ではね。それから、クラヴィーアについては———できるだけうまく弾きます。ただ、ザルツブルクでひとつお願いしたいのは、つまり、ぼくが以前のようにヴァイオリンを弾かないということです。———ぼくはもうヴァイオリン弾きはごめんです。クラヴィーアを弾きながら指揮をし———アリアの伴奏をしたいのです。・・・」

（モーツァルト書簡全集Ⅳ、274ページ）

. . . .

パリでは、はじめて父親の直接的マネージメントなしに独力で選帝侯や貴族、音楽家たちを訪問しプレゼンテーションをした。そんな中、こともあろうに最愛の母親が客死してしまった。モーツァルトの悲しみはいかばかりであったろうか。母親の死の悲しみを乗り越えて社交界のパリでの音楽活動に生きがいを見出した丁度その頃に、コロレード大司教から帰国命令を受け、そして父レーオポルトからも帰郷の督促の手紙を受け取った。母親の死後２ヵ月後にあって、四面楚歌の状態に立たされた中でモーツァルトが旅に対する私見を切々と説いた手紙がこれである。

モーツァルトが旅に思いを馳せる気持、人生観、価値観が述べられている。世間の狭い故郷ザルツブルクの閉塞感も旅に出たい理由に上げている。少年時代には過酷すぎる旅が何度もあったが、23歳のモーツァルトの心境を「旅をしない人は…まったく哀れな人間です。…いつも同じ場所にいれば、だめになります。」と述べて、旅が自分と音楽を成長させているという旅の意義を見出している。自分の不満を分析し自信と向学心を綴った説得ある手紙である。モーツァルトは旅が本当に好きだったことを示す貴重な手紙である。

(3)「モーツァルトの旅」のまとめ

①モーツァルトの生きた時代は歴史的大変革の時代：

当時のヨーロッパは政治、経済、文化、科学技術等の大変革の時代であった。モーツァルトはそれらの国々の真っただ中を旅したことになる。

ⅰ）「太陽の沈まぬ帝国」神聖ローマ帝国ハプスブルグ王朝マリア・テレジアと息子達の皇帝の時代に生き、拝謁を許されて曲を献呈したほか、**ⅱ）**イギリスではアダム・スミスやジェームス・ワットが生きた資本主義と産業革命の時代、**ⅲ）**フランスでは貴族支配（アンシャン・レジーム）から市民の人権確立をめざすフランス革命への移行の時代、**ⅳ）**プロシアではドイツ文芸全盛の時代を、さらにイタリア、オランダ、プラハなど音楽文化最盛の各国を訪ねた。皇帝や王妃への謁見、多くの貴族との出会い、著名な音楽家達と交遊した膨大な紳士録が残されている。「時代環境」はモーツァルトの成長に多大な影響を与えたに違いない。

②モーツァルトの旅＝人生そのもの：

人生の1/3の旅の途上で膨大な人脈を形成し、作曲、演奏、献呈、受注、納品を行った。音楽活動を通して多くの歓喜、悲哀、怒り…を味う。・・・アロイージアとのめぐり逢いと失恋、母の客死と父親宛のやさしい慰めの手紙、コンスタンツェとの出会い、大司教との確執、失職、父レーオポルトとの確執、ザルツブルク別離、ウィーンへの定住、コンスタンツェとの結婚、フリーランス作曲家として独立、父レーオポルトとの雪解け、フリーメイソンへの入団・・・等。経験で得たさまざまな感情は膨大な数の名曲に散りばめられている。**“モーツァルトの旅＝人生そのもの”で**あった。

§４．おわりに：人生≡「人がこの世に生きてゆくこと」≡旅

モーツァルトの音楽はあらゆる年齢層の人々に好まれていることは確かである。

例えば、クラシック作曲家人気投票（朝日新聞土曜版2010年4/10）によると、最も高い支持を得たのがモーツァルトであり、次点以降がショパン、ベートーヴェン、チャイコフスキー・・・・と続いている。

モーツァルトの曲は長調をとる曲が多く軽快で優美な曲が多い。しかし、歳を経るにつれて深い悲しみを帯びた「天国」を思わせる厳かな曲が多くなり、短調の名曲は殊に哀愁の度を増す。**いつ、どこで、どのような状況にあっても、人々はモーツァルトの曲を耳にする時、不思議に拒否反応なく心が和み爽やかな気分にさせられる。**それは、モーツァルトの名曲には彼が膨大な旅と人生で味わった多種多様の経験・感情（喜び、悲しみ、怒り、哀れみ…）が凝縮され珠玉のような音や旋律の形となって溶け込んでいるので、私たちが経験してきたさまざまな感情の周波数のどこかに容易に共鳴し、誰しも心地よくその音楽の美に引き込まれてしまうからであろう。

膨大な「モーツァルトの旅」の特徴は、

●（彼の旅は）ただひたすら音楽へと収斂する形のものであった。音楽を中核とし音楽に関係ないものはほとんどなく・・・・度重なる旅行が点在しているのでなく旅のただなかで（人生が）展開してゆく・・・　　by 海老沢　敏

●モーツァルトがこの地上の客に過ぎなかったことはある程度、真実である。・・・・モーツァルトはどこにでも本当に安住しなかった。彼が生まれたザルツブルクにも、彼の死んだウィーンにも・・・・・旅行が彼の生涯の大きな部分を占めているのである。　　by アルフレート・アインシュタイン

という、冒頭に述べた二つの言葉に非常に良く表れている。

人生の旅の途上、膨大な数の名曲をつくり、愛妻コンスタンツェと二人の息子を残して35歳で旅たっていったモーツァルトは

旅に病んで夢は枯野をかけめぐる　　芭蕉

と同じような心境であったのではないだろうか。(20140930 revised)

（モーツァルト：クラリネット協奏曲イ長調KV622）
http://www.youtube.com/watch?v=8R3wk4WEPeQ

（参考：モーツァルトの旅のWWW）
p://www.mozartways.com/content.php?id=1292&newsdetail=76&ctype=termin&m=5

（参考文献）

1）海老沢敏:横顔のモーツァルト、音楽之友社
2）海老沢敏:新モーツァルト考、NHK市民講座、1984
3）A.アインシュタイン著・浅井真男訳：モーツァルト・その人間と作品
4）海老沢敏監修:モーツァルト事典、東京書籍
5）音楽之友社：モーツァルト名曲事典
6）帝国書院：高等学校世界史地図、p31.17～18世紀のヨーロッパ
7）ハーバート･クッファーバーグ著・横山一雄訳：
アマデウス・モーツァルト点描、音楽之友社
8）海老沢敏、高松英郎：モーツァルト書簡全集Ⅳ、274ページ）、白水社
9）モーツァルト：「サントリー音楽文化展」記念出版　TBSブリタニカ
10）萩原恭男校注：奥の細道(松尾芭蕉）、岩波文庫
11）海老沢敏･R.アンガーミュラー共著：モーツァルトの旅 1-5
音楽之友社，1991-92
12）柴田治三郎：モーツァルトの手紙 上、下-その生涯のロマン-、岩波文庫
13）井上太郎：モーツァルトと日本人、平凡社新書
14）ミシェル・パルティー、海老沢敏監修：
モーツァルト－神に召されしもの－、創元社
15）池田香代子：伝記　モーツァルト-その奇跡の生涯-、偕成社
16）野澤和男：私のモーツァルト探訪、WWW掲載
（第１回）モーツァルトに乗った船、（第２回）モーツァルトの家系と息子たち

（注）本文の理解向上のために、WWW上に公開された幾つかのモーツァルトの曲のyoutubeを使用させていただきました。